
High symmetry

L i t a l y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H i g h s y m m e t r y

【Nコード】

N 3 5 6 1 C

【作者名】

L i t t a l y

【あらすじ】

警告の鐘の音が鳴ってた事を覚えてる。その音だけが今も耳の奥にこびりついている。

どこか遠くのほうで警告の鐘が鳴ってる。

どこかは分からないけど、それは確かに鳴ってる。

彼はきつとその事を知ってて、

だからその音が私の耳に届かないようにと、

私の耳にそつと口づけをする。

私の後頭部と背中に回された彼の手が小さく震えてる。

私の胸に押し付けられた彼の胸の音が聞こえる。

警告の鐘はもしかしたら、彼の為に鳴ってるのかもしれない。

彼は私の耳から顔を離し、

静かに運動を続ける。

どちらも声は発さない。

ただ呼吸と肌の擦れ合う音だけが薄暗い明け方の部屋に響く。

私は彼の肩越しに天井を眺める。

天井にはちよつとした「しみ」があつて、それは何かの形に見える。

多分それもまた何かを表してるんだ。

でもそれがどういった記号で、何を表すものなのかは分からない。

彼は私の肩越しにシートを眺めてる。

シートにはちよつとした「しわ」があつて、それはきつと何かの形に見える。

彼もまたそれに何かしらの意味を探してるんだ。

その事が私には分かる。
はつきりと。

でも、この行為に意味なんてない。

だから私たちはこの行為の後で深く絶望する事になる。

その事を彼も私も知っている。

だから、それでも私たちは天井の「しみ」とシーツの「しわ」に何かしらの意味を探さないわけにはいかなかった。

彼はシーツの「しわ」に射精をし、

私は天井の「しみ」を私の内側に受け入れる。

彼が泣いてるのが分かる。

声を立てずに、そつと静かに泣いている。

その涙は誰の目に映る事もなく、シーツのしわの隙間に消えていく。

私は「終わり」を受け入れる。

[illegible]

彼と初めて出会ったのは、春と夏の間にある僅かな隙間みたいな季節だった。

駅の高架下の小汚い路地。

彼はその路地の隅っこに座り込み、真正面をぼんやりと眺めてた。その手にはギターが握られてたけど、それを弾く気配はなかった。

ただ、ぼんやりと空中にある何かを眺めてるようだった。

彼と目が合った。

そして次の瞬間彼が口を開いた。

「一曲どう？」

私はびっくりしてつい足を止めてしまう。

でも何も言葉が出てこない。

せめて笑顔を作ろうと思ったけど、

私の顔の筋肉は、私の意志をうまく反映してはくれない。

あるいは、私の本当の意志に従って無表情を保ってるのかもしれない。

「夏が近いよね」

と彼が言った。

私は声を出さず、小さくうなづいた。

そして次の言葉を待った。

でも次の言葉はいつまで経っても彼の口から出てこなかった。

もう結構遅い時間だし明日も学校だから早く帰らなきゃ、そんな事を考えてた。

でもなぜだかその場を立ち去れなくて、だから彼にかける言葉を探した。

「歌わないんですか？」

我ながら、なんか嫌味な言い方だなんて思った。
でもそれくらいしか私の発するべき言葉が思いつかなかった。

「うん」

彼は何でもなさそうにそう言った。

そこで私はちよつと混乱する事になる。

「一曲どう？」と言って止めておいて、歌わない。
言葉も発さない。

そこには一体どんな意味があるのかちよつと想像してみたけど、
私にはまったく分からなかった。

「あ、ごめん、帰りたいかった？
無理に呼び止めちゃった？」

彼が突然我に返ったように言った。
その声のイントネーションが、さっきまでの虚ろな感じとは全然違
くて、

私はもつと混乱する事になる。

「帰りたいっていうか、
明日も学校とかあるし……」

「そか、そうだよな。
ごめんね。
じゃあ気をつけてね」

私は無言でうなづく。

私は慌てたり、混乱したりするとうまく言葉が言えなくなる。
相手に嫌な印象を与えるだろうなって思っし、自分でもどうにかし

たいとは思ってるけど、
こればかりはどうしても治らない。

「よい夜を」

と最後に彼は言って軽く手をあげた。
私はもう一度無言でうなづいて、歩き始める。

街頭が照らす帰り道で私はそつと呟いてみた。

「よい夜を」

そこにはリズムも、メロディーも無かったけれど、
何故かその言葉は歌のように聞こえた。

++++++
++++++

俺はアンタの事が憎かったんだと思う。
そう、いつだってアンタの横にいる限り俺は「駄目なほうの奴」だ
った。

俺だって相応の努力をしてきたつもりだ。
あんたにだって負けないくらい。
なのに人はみんなアンタの名前を呼ぶ。
どいつも、こいつも。

だから奪ってやった。

アンタが一番大切にしてたもの。
ぶち壊しにやってた。
ざまーみるだ。

本当はずっとほくそ笑んでたんだろう？
アンタの横でいつもへらへらしながら、
ずっとアンタに憧れてた。
どうあがいたつてとどきやしない。
俺が苦悩してることもアンタは知ってた。
知ってて友達ヅラして俺に笑いかけやがったんだ。

この世界には二つの人種がいる。
「もつもの」と「もたざるもの」だ。
アンタが前者で、俺が後者。

「もつもの」はいつだって優遇される。
だから優しくだってなれる。
優しくなれるから、優しくされる。
愛される。
愛されるから、より深く愛せる。

だけど「もたざるもの」はその逆だ。
何をやってたつて人並み以下。
どれだけ努力したつて結果なんて見えやしない。
どれだけ努力したつて、見てくれる人はいない。
心は静かに腐敗し、音も無く歪む。
心が歪めば余計に愛されなくなる。
どれだけ取り繕っても、心の中の黒い「しみ」は広がり続ける。
あがいても、あがいても、抜け出せやしねえんだ。

くだらない感傷だ？
違う。

ただの事実だ。

「もつもの」は幸せな人生をまっとうし、
「もたざるもの」は不幸せな人生をまっとうする。

どこかで捻じ曲げなきゃいけない。

俺にはアンタほど多くの選択肢を与えられてはいないんだ。
奪ってでも勝ち得るか、一生負け続けるか。

俺が間違ってる？

何とでも言えばいいさ。

それとも一生めそめそわびしい人生をまっとうしろっていうのか？
負けっぱなし人生にもあるはずのささやかな喜びを抱きしめて生きて下さいってか？

アンタ達の幸せな世界の下敷きとして？

「愛せよありのままの世界を」

そんな言葉を吐くのはいつだって多くを手にする側の人間だ。

そもそも、取り分の総量が違うんだ。

いつだって残りカスの世界で生きる人間の苦悩は切り捨てられる。
いつだって勝ち得る側を基準に正義の概念は作られる。

そう、このくだらない出来レースをはじめたのは、
そもそものアンタたち「もつもの」の側の人間なんだ。

アンタ達の存在が日陰を作る。
日陰に生じる腐敗をアンタ達は嫌悪する。

自分が日陰を作り出したのに、
その陰が引き起こす現象は他人事として処理する。
汚いカビを憎悪するように、

俺達の心に巢食う影を憎悪する。

その「腐敗」を作り出すことに自分達が加担しているとは思えもしない。

ただ「腐敗」を悪として裁き、切り捨てる。

誰も手を差し伸べはしない。

「もたざるもの」の苦悩も歪みも知ろうとはしない。
そうして生きた代償がこれだ。

これはアンタに対する報いだ。

散々「もたざるもの」を足蹴にして、

自分達だけのうのうと平穏な人生を生きてきたその代償だ。

「もたざるもの」の苦しみを知るべきなんだ。

アンタの心には二つの楔が穿たれる。

大切なものを失うこと。

信じた人間に裏切られること。

それはアンタに大きな混乱をもたらす。

その混乱はアンタのこれからの人生にずっと付きまとい、影を落とす。

信じることに怯え、

もし信じる事ができたとしても、

今度は失う恐怖に縛られる羽目になる。

二重の鎖だ。

逃がさない。

いつかアンタも気づくだろう。

自分が今まで掲げてきた正義がどれだけ脆く、不確かだったのかを。
自分が今まで気にも留めずに歩いたその道のりの脇に、どれだけの
敗北者がいたのかを。

アンタは知らなきゃならない。

アンタは今まで世界の半分でしか生きていなかったということ。
アンタの知らない残り半分の世界がどれほど歪んだ世界なのかを。

……

俺はやり遂げた。

覆るはずの無い勝敗を覆したんだ。

「もつもの」を相手によくやった。

手に入れたんだ。

どんな手を使つてもそれを成すべきだった。
しない訳にはいかなかったんだ。

なのに、この涙はなんだ？

++++++
++++++

「じゃあ元気でね」

と、言つて彼は私に一本の傘を渡す。

私は笑顔をうまく作る事すら出来ずに、ただ顔を上下に小さく動かす。

とても機械的に。

そんな機械的な自分の動作が可笑しくて、
なんだか、なぜだか、目から何かが零れそうになる。

本当に最後の瞬間まで何一つうまく出来やしない。

ドアが静かに閉まる。

彼のアパートの古ぼけた扉が、よりいっそう古めかしく見えた。
私はその扉の前にしばらく立ち尽くし、

その後でドアノブに彼が渡してくれた傘をそっとかける。

冷たい雨に濡れない事が、いつだって正しい事だとは限らない。

コンクリートの地面が雨に濡れて黒く染まっている。

深い灰色に包まれた街は、まるで私の知ってるそれと違って、

だから、きっとそのせいで堪えていた涙がこみ上げてしまったんだ。
大丈夫。

この雨が洗い流してくれる。
全部。

秋の終わり、朝の始まりに冷たい雨が降る。
街はとても静かで、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3561c/>

High symmetry

2010年12月14日21時26分発行